

# 臨床評定尺度を用いた家族機能のプロセスモデルの実証的検証\*

正 木 直 道\*\*  
立 木 茂 雄\*\*\*

## はじめに

本稿では、近年注目を集めている家族システムの統合モデルのうち、特にカナダを中心として活発な調査研究が進められている「家族機能プロセスモデル (Process Model of Family Functioning)」(Santa-Barbara, Steinhauer and Skinner, 1981) を、わが国の臨床家族の相互作用データをもとに検証する。

カナダにおける家族研究は、1960年代前半に精神科医ネーザン・エプステインが、ニューヨークのアッカーマン・インスティテュートで家族療法の訓練を受けた後、モントリオールのジュエッシュ・ホスピタルで家族療法の臨床を開始した時点から本格化する。アッカーマン・インスティテュートでの家族療法研修は精神分析的な枠組みに立ったものであったが、モントリオールに戻った後のエプステインは、個人の心的機能を決定する上で家族内の問題解決、権力や権威、あるいは役割といった社会学的な概念を重視する立場に傾斜していった。アッカーマンはライブで、数多くの公開セラピーを実演し、賛同者の輪を広めるとともに、マギール大学の学生とその家族をサンプルに健康な家族機能に関する理論モデルを構想し、実証的な調査研究を行った。この結果生まれたのが Family Category Schema (Westley and Epstein, 1969) である。

1970年代に入るとエプステインはオンタリオ州マクマスター大学医学部に転じた。そこで彼は当時注目され始めた一般システム理論を、自身の家

族機能モデルの概念枠組みに取り入れた。その結果生まれたのが「家族機能のマクマスターモデル (McMaster Model of Family Functioning)」(Epstein, Bishop and Levin, 1978) である。当時、数多くの若く野心的な家族臨床家や研究者がエプステインのもとに集まり、マクマスターモデルに基づく家族療法の過程分析や効果測定調査、さらには家族療法家の訓練のための実践モデルの開発に関する研究などを、勢力的に行った。

1980年代に入ると、エプステインの共同研究者の一人であったジャック・サンタバーバラがエプステインのもとを辞してトロントで独立した。その後サンタバーバラは、トロント子ども病院の児童精神科医であるスタインハウアー、オンタリオ州アルコール薬物嗜癖研究財団の計量心理学者スキナーらと家族研究グループを組織した。トロント・グループは、Family Category Schema やマクマスターモデルを再吟味し、構成概念間の関係をより明確化するとともに、特にスキナーの提案を聞きいれて家族機能モデルの質問紙尺度の開発に力を入れた。このようにして生まれたのが家族機能のプロセスモデル (Santa-Barbara, Steinhauer and Skinner, 1981; Tatsuki, 1985; 正木, 1987) である。ちなみに、スキナーは PRF (Personality Research Form) の開発者であるウェスタン・オンタリオ大学のジャクソンの高弟で、家族研究の分野に洗練された尺度開発の方法論、すなわち構成概念妥当化パラダイムを持ち込んだ最初の研究者である。

本稿は、日本の臨床家族の実際の相互作用を、家族機能のプロセスモデルに基づく臨床評価尺度

\* 本稿は立木が指導した正木の1986年度関西学院大学社会学研究科修士論文にもとづくものである。

\*\* 米国ニュージャージー州ミズーリ・ルーテル派牧師

\*\*\* 関西学院大学社会学部

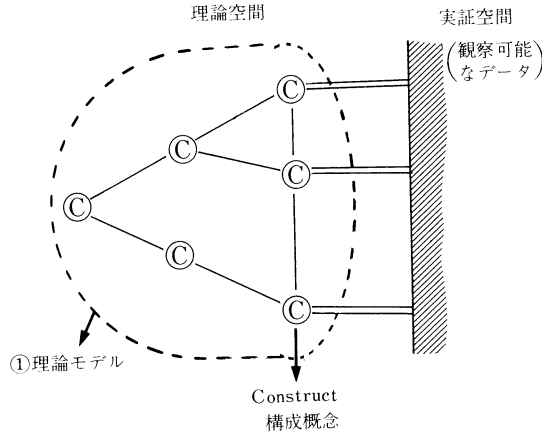


図1 理論モデル

(Clinical Rating Scale, 以下 CRS と略す) を用いて評価し、得られたデータからプロセスモデルの理論的・内的・外的妥当性を検証する。その場合の検証の枠組みは、構成概念妥当化パラダイムに準拠している。

### I 構成概念妥当化パラダイム

構成概念妥当化パラダイム Construct Validation Paradigm (以下、CVP と略す) は、計量心理学の領域で発展した概念である。1954年、アメリカ心理学会 (APA) で初めて紹介されて以来、CVP は心理テストの作成、妥当化、およびテストの科学的な評価の枠組みとして広く承認されており (Cronbach and Meehl, 1955; Loevinger, 1957; Campbell and Fiske, 1959; Jackson, 1971; Wiggins, 1973; Messick, 1981; Skinner, 1981; Burisch, 1984)、最近では、精神病の分類学 (Skinner, 1981) や家族機能モデルの評価 (Skinner, 1985; Tatsuki, 1985; 池埜ら, 1990; 大塚・立木, 1991; 武田・立木, 1991) に適応されている。

この概念の基本的な考え方は、家族機能を決定する上で重要だと考えられる仮説的構成概念を理論面及び実証面の両方から検証していくことにある。理論モデルは実証的なデータにもとづいた反証に耐えない限り価値がない (Popper, 1972)。CVP は、家族機能に関する理論モデルの検討お

よびその評価尺度開発の枠組みとして、唯一、理論的および実証的研究の両面を統合するパラダイムなのである。

さて、CVP について図1をもとに説明しよう。CVP は次の3つの段階より成る。

その第一は、理論的要素である。ここで思索上の理論モデルは、構成概念 (図1中◎と表わされる) のネットワークとして表現される。理論的要素では次のことが吟味される。1) 各構成概念 (次元) の定義、2) 各構成概念間の機能的な関係の定義、3) 理論モデルと外的変数の仮説的な関係の定義、である。

第二は、理論モデルと観測されるデータとの適合性を検証する構造的/内的要素である。プロセスモデルには6つの次元があり、各次元内に下位概念が合計37あって、それらがCRSの項目になっている (付録「プロセスモデルの下位概念」参照)。この時、次元を尺度、下位概念を項目と言い替える事ができるが、構造的/内的要素では項目間、項目・尺度間、および尺度間の相関を評価するのである。ところで、実証的データは、理論モデルを表す部分と残余項を表す部分から成っていると考えることができる。

$$\text{実証的データ} = \text{理論モデル} + \text{残余項}$$

残余項が小さく、理論モデルとデータとの一致度が高いほど優れた理論モデルと言えるわけであ

る。まず、理論モデルとデータの一致度に関しては次のような分析が行われる。1) 項目・尺度間相関—強い相関があるほど項目が尺度をよく代表していることが証明される。2) 項目・他尺度間相関—相関が弱いほど他の尺度との重複度が少ないことが言える。3) 尺度間相関—各尺度が家族機能の独立した側面を測定していれば相関が弱くなる。4) 尺度間相関の因子分析—因子構造と理論モデルの一致度を検証する。次に、残余項に関しては、測定誤差を小さくするために測定の信頼性を高めなければならない。測定の信頼性は、5) 項目間相関をもとに、内的一貫性信頼性 (Cronbach の  $\alpha$  係数) を用いて調べられる。

第三は、外的要素である。ここでは、CRS 以外から得られたデータを用いて様々な妥当性が検証される。最終的に CRS による判断が一般性を有するか、つまり、プロセスモデルが実証的な反証に耐えうるかを評価する段階であり、CVP のハイライトである。まず、基準関連妥当性が調べられる。これは 1) 併存的妥当性と 2) 予測的妥当性からなる。3) 臨床的妥当性は臨床家の観点からどの程度実践的な価値があるかを検討する。最後に、尺度が測定したい構成概念をどの程度測定できているかを調べる。それが、Campbell と Fiske (1959) による multitrait—multimethod matrix を用いた 4) 構成概念妥当性の検証である。

## II 方 法

### 1. 対象

本研究は、淀屋橋心理療法センターで治療された10症例のビデオテープを用いて行われた<sup>1)</sup>。原則として家族全員が出席し、家族員間の相互作用が観察可能なケースである。これら10ケースについて、それぞれ治療前と治療後のセッションを観察し、CRS で評価した。主訴は、登校拒否5、非行2、拒食症2、強迫神経症1である。IP の年齢は、10才 (小5) ~18才 (高3) で、14才が最も多い。性別は、男性4、女性6。両親の学歴は、大卒レベルが8、高卒レベルが2。父親の職業は、管理

職3、サラリーマン3、技術職2、専門職1、芸術家1である。同センター来所までに何らかの相談機関を訪れている家族が殆どであり、治療に要した平均面接回数は、主訴が登校拒否と非行の家族では12回であるのに対し、拒食症と強迫神経症を主訴とする家族では25回である。評価者の観察時間は、平均して44分。予後は、概して良好である。

### 2. 評価手続き

評価は次のような手順で行われた。

- a) 家族のエンアクトメント場面のビデオを観察する。ビデオはランダムに観察した。評価者には事前にセッションに関する情報は一切与えられておらず、評価者間の会話は勿論ない。面接日時も隠されている。
- b) 二人の評価者が別室に分かれ、CRS に得点をつける (約20~30分)。
- c) 評価者間の得点の相関を計算する。
- d) 観察した家族の相互作用について評価者間で話し合い、注意事項があればその都度検討する。

なお、CRS を用いる場合、評価者間信頼性が一定のレベルに達していることが必要である。本研究では、約3カ月を要して評価者間信頼性を高めていった。その過程については、別稿 (正木、1987) で報告したのでここでは省略する。ちなみに、本研究では20本のビデオを観察した結果、評価者間信頼性 (ピアソンの  $r$ ) は、0.62~0.98、中央値が0.82であった。

## III 結果と考察

本研究は CVP に沿ってなされた。従って、結果も CVP の三つの要素に沿って報告する。

### 1. 理論的要素

#### 1) プロセスモデルの概要

プロセスモデルでは、家族機能の目標は様々な課題の達成であると考えられる。課題が達成されるためには、家族メンバー内で役割が分担されていなければならない。それは、コミュニケーションのプロセスを通してなされる。また、家族メンバーが互いにどのくらいの距離を持っているかという

1) 本研究で用いた10症例は、オルソン円環モデルにもとづく大塚・立木(1991)の研究で用いたものと同一のものである。

ことと、どのように互いに影響し合っているかということも課題の達成を左右する。そして、家族の課題達成のプロセスはすべて、家族の持つ価値と規範の影響を受けるのである。このように考えると、プロセスモデルには、主要な6つの構成概念(次元)があることがわかる。

- ① 課題達成 Task Accomplishment
- ② 役割遂行 Role Performance
- ③ コミュニケーションと情動表現  
Communication and Affective Expression
- ④ 情動関与 Affective Involvement
- ⑤ コントロール Control
- ⑥ 価値と規範 Values and Norms

Steinhauerらは、このモデルを、図2のように示している。図2では、点線の矢印は課題達成に直接的に関わっている事を示している。また、実線の矢印は間接的に課題達成に関わっている事を示している。図の左側の矢印は、各々の次元の抽象度を示しており、図の下に位置する次元ほど抽象的な概念である。なお、各次元内の下位項目については付録を参照されたい。

2) 各構成概念の定義

プロセスモデルの6つの次元は、正確に定義されている(正木、1987)。また、各次元は下位概念(CRSの項目)によって操作的に定義されているが、これも明確になされている(正木、1987)。しかし、細部に注目すると4つの問題点があることがわかる。

第一に、各項目の説明が簡単すぎる。この点については別稿で述べた(正木、1987)。

第二に、いくつかの項目に類似性がみられる。例えば、「Receiver Openness(コミュニケーション)とQuality of Involvement(情動関与)」、「Security(情動関与)とQuality of Involvement(情動関与)とConstructiveness(コントロール)」、「Autonomy(情動関与)とLatitude(価値と規範)」などは概念が極めて似ている。

第三に、コントロール次元のControl MaintenanceとPredictabilityの定義づけに関してである。その他の項目では、高得点は一貫してその側面における家族の強さ(健康度)を表している。しかし、これら二つの項目では、その側面において健康な家族でも不健康な家族でも高得点を取ることが可能である。

そして第四に、ダブルバインド状況がClarity(コミュニケーション)、Sufficiency(コミュニケーション)、Implicit/Explicitness(価値と規範)という三つの項目によって同時に評価されうるという問題である。従って、第二の点と同様、三つの項目に同じ様な得点が付けられる可能性がある。

以上のように、各構成概念は明確に定義されているが、その操作的定義に関しては、概念の重複などの問題点がみられるのである。

3) 各構成概念の機能的関係についての定義

プロセスモデルの特徴は6つの構成概念が全て相互に依存すると考える点にある。例えばプロセスモデルの情動関与とコントロールは、オルソン円環モデルのきずな、かじとりにそれぞれ対応するが、これらが相互に依存しあうと考える点で円環モデルとは決定的に異なるものになるのである。

4) 外的変数との仮説的な関係の定義

プロセスモデルは、6つの次元から家族機能を

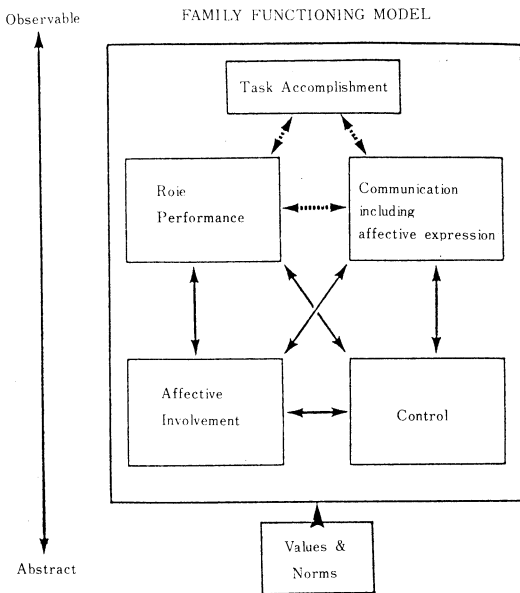


図2 プロセスモデル (Steinhauer, 1984)

表1 尺度間相関

	TA	RP	COM	AI	CON	VN
課題達成 (TA)	—					
役割遂行 (RP)	.91	—				
コミュニケーション (COM)	.71	.84	—			
情動関与 (AI)	.76	.86	.82	—		
コントロール (CON)	.83	.91	.82	.92	—	
価値と規範 (VN)	.83	.89	.77	.86	.90	—

(すべて $p < .005$ ,  $n$ は18~20)

表2 尺度の内的—貫性信頼性

尺度 (構成概念)	$\alpha$	項目数
課題達成	.84	7
役割遂行	.97	5
コミュニケーション	.92	9
情動関与	.91	4
コントロール	.66	5
価値と規範	.61	7

評価するモデルであるが、各次元で好ましいプロセスを踏んでいる家族が機能的な家族と仮定されている。

## 2. 構造的/内的要素

### 1) プロセスモデルとデータの一貫性の検証

#### (1) 項目・尺度間相関

課題達成では0.16~0.90を示し、中央値は0.80であった。役割遂行では0.91~0.97を示し、中央値は0.97であった。コミュニケーションでは0.64~0.95を示し、中央値は0.82であった。情動関与では0.83~0.94を示し、中央値は0.89であった。コントロールでは0.10~0.91を示し、中央値は0.88であった。価値と規範については、中央値は0.94であった。中央値に示されているとおり、項目・尺度間相関は全般的に高く、各項目はその含まれる次元の内容をよく代表していると考えられる。しかし、Basic Tasks (課題達成)とControl Maintenance, Predictability (コントロール)については低い項目・尺度間相関がみられた。Basic Tasksに関しては、全てのケースで高得点がつけられていた。家族の基本的ニーズ(衣食住など)を満たす能力は全ての家族に備わっているということであろう。Control MaintenanceとPredictabilityに関しては、理論的考察の項で述べたように項目の定義づけ問題があるようであ

る。いずれにしても、この3つの項目に限っては、その含まれる次元を効果的に代表していないと考えられる。

#### (2) 項目・他尺度間相関

項目・他尺度間相関に関しては、紙面の関係上その全てを報告することはできない。しかし、一つ一つの項目・他尺度間相関は、上記のBasic Tasks, Control Maintenance, Predictabilityを除けば適度から高い相関を示した。全般的にみて、各項目は他の尺度と重複している部分が多いと考えられる。

#### (3) 尺度間相関

尺度間相関については、表1のような結果が得られた。相関は0.71~0.92を示し、中央値は0.84と非常に高かった。このことから、各次元は家族機能の独立した側面を測定していない事がわかる。

ちなみに、プロセスモデルから発展した自己報告質問紙Family Assessment Measureの第三版(FAMⅢ)においても、一般尺度0.39~0.70、二者間関係尺度0.63~0.87、自己評価尺度0.25~0.63と尺度間相関は高かった(Skinner et al., 1983)。また、理論モデルが極めて類似したマクマスターモデルから発展した自己報告質問紙法Family Assessment Device (FAD)では0.37~0.76を示している(Epstein, Baldwin and

Bishop, 1983)。このように、プロセスモデルもマクマスターモデルもともに Family Category Schema (Westley and Epstein, 1969) から発展した家族機能モデルであるが、この両者はともに高い尺度間相関を示すことが、再度確認されたことになる。

このため、確かに Steinhauer (1981) は「家族機能に関する理論モデルが家族の普遍的な機能を全てカバーする包括的な理論になるためには、容易に構成概念の数を減らしてはいけない」という意味の事を述べているけれども、上記のような結果をみる限り、構成概念(次元)の数が減らされることが指示されているように思われる。

なお、理論的考察のところで、内容的に類似している項目について触れたが、それらの項目間の相関は以下のものであった。Receiver Openness と Quality of Involvement は 0.74、Security と Quality of Involvement は 0.92、Security と Constructiveness は 0.93、Quality of Involvement と Constructiveness は 0.94、Autonomy と Latitude は 0.74。これらの結果も、尺度間相関の高さと関係があるように思われる。

#### (4) 尺度間相関の因子分析

プロセスモデルの尺度間相関は、何れも非常に高かった。そのため、6つの尺度間の相関を因子分析しても因子は一つしか出てこないことが予想された。実際、尺度間相関の主成分分析を行った結果、固有値が1以上の主成分はやはり1個であった。寄与率は実に88.3%である。勿論、サンプル数が18(欠損値のため2ケースは削除して計算)では因子分析をするには少なすぎるのかもしれない。それでもこの結果からは、プロセスモデルと得られたデータとの一致度は低いと考えなければならないだろう。

#### (5) コントロール次元の項目間相関の因子分析

コントロール次元に属する Control Maintenance と Predictability は項目・尺度間相関が他の項目と比べて弱かったのでコントロール次元の因子構造を調べてみた。主成分分析を行った結果、固有値が1以上の主成分の数は2個であった。第一主成分の寄与率は53.4%、第二主成分の寄与率は29.8%である。因子負荷量から、第一主成分はコントロール次元の共通因子が、第二主成

分は Control Maintenance と Predictability が高い負荷量を示した。これら二つの項目がコントロール次元を代表していないという項目・尺度間相関でみられた結果が裏うちされた形になったわけである。

#### 2) 測定の信頼性の検証

内的一貫性信頼性が Cronbach の  $\alpha$  係数を用いて調査された。その結果は、表2の通りである。 $\alpha$  係数は 0.61~0.97、コントロールと価値・規範を除いては、非常に高い内的一貫性信頼性がみられた。コントロール次元の  $\alpha$  係数の低さは、やはり Control Maintenance と Predictability の存在が関係していると思われる。また、価値と規範に関しては、実証的な観察の機会が極めて少なかったことに起因するものと思われる。

なお、CRS の全項目についての内的一貫性信頼性係数は 0.98 と、FAM I、FAM III と比較しても極めて高い信頼性が得られた。

### 3. 外的要素

#### 1) 基準関連妥当性の検証

##### (1) 臨床家の評価との相関

評価者が全てのセッションを観察し終わった後、CRS の各次元についての評価が淀屋橋心理療法センターのセラピストによってなされた。各次元における家族の機能度について健康か病的かという二分法的判断が下されたのである。その後、臨床家の判断と CRS の得点との間の点双列相関が調べられた。結果は、0.39~0.84、中央値は 0.65 であった。適度な相関を示している。熟練した臨床家の判断を外的基準とする場合、適度な併存的妥当性が認められたといえよう。

##### (2) 治療前-治療後における平均得点の差の検定

各被験者は治療前、治療後において、課題達成、役割遂行、コミュニケーション、情動関与、コントロール、価値と規範の6つの尺度上で評価が行われた。しかし、尺度間相関を主成分分析すると主成分が1個しか見つからず、その寄与率は88.3%であった。プロセスモデルとデータが一致しているといえるためには、6個の成分がなければならなかったのにである。そのため、6つの尺度はそれぞれ独立しているとは考えられず、結局一つの主成分に支配されていると考えられるのであった。そこで、治療前-治療後における被験者

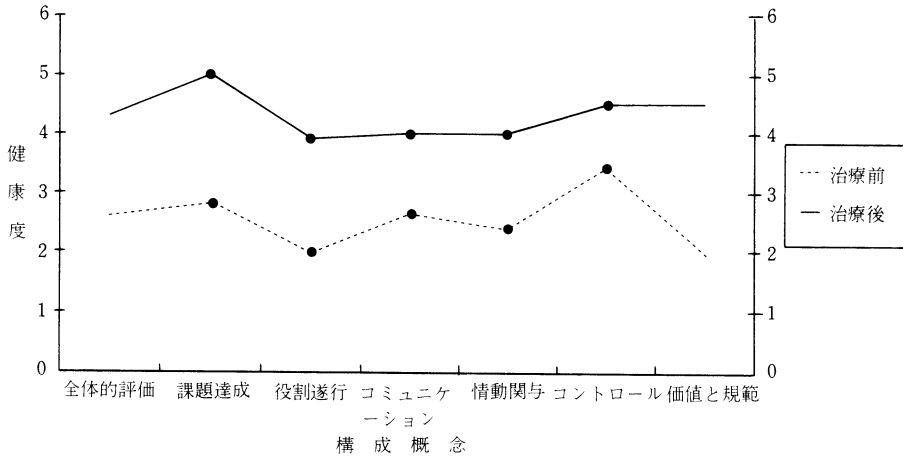


図3 CRSのプロフィール

の因子得点を用い、治療前—治療後における平均得点の差の検定 (t検定) を行った。結果は有意であった ( $t = -2.37, p < 0.05, df = 9, n = 10$ )。以上の結果から、CRSの各尺度が1つの主成分に支配されているとみなした場合、治療前と治療後の評価には有意な差が認められると判明した。しかし、サンプル数が少ないことは留意しておく必要があるだろう。

## 2) 臨床的妥当性の検証

### (1) 臨床家の印象とプロフィールに示されたCRSの得点との比較

治療前と治療後でCRSの得点にどのような変化が見られるかは、プロフィールで示す事により明らかにできる。一方、臨床家も治療前後の家族の変化について何らかの印象を持っている。そこで、CRSの得点と臨床家の印象を比較し、CRSの臨床的な意義について検討した。ここでは、紙面の関係上一つのケースに限って報告する。

図3は、登校拒否を主訴とする家族のプロフィールである。この家族は、完全な葛藤回避型の家族ということであった。治療前では次のような交流パターンが見られたことに臨床家は注目していた。

① 母が父にIPに対してもっと強く出るよう要請する。② 父が強く出るとIPが反発し、家族内の緊張は高まる。③ 妹が滑稽な行動をし、それを見て母が笑う。④ 父はIPを叱れなくなり、家族内の緊張は下がる。⑤ 父母が穏やかな語調で注

意してもIPは聞かない。⑥ 母が父にもっと強くできるように要請する (ループの①にもどる)。

このようなパターンの繰り返しだったのである。それが、治療後では父がIPに強く出て緊張が高まった時、母は妹をコントロールできるため緊張は高まる一方であり、父が効果的に機能して問題は解決していたのである。図2を見ると、治療後は治療前に比べ、得点が全般的に高くなっていることがよくわかる。機能的な交流パターンに変化することにより、全ての次元で得点が上がっているのである。特に、父母の役割が治療前では効果的に統合されていなかった事が臨床家の印象により理解できるが、プロフィールでも役割遂行の得点が最も低くなっていたことが見てとれる。その意味で、セラピストの印象は、CRSの得点をよく裏付けているといえよう。

なお、他の9つの家族についても、プロフィールで示された家族機能の特徴は、臨床家の印象により裏付けられた事を報告しておく。

### (2) プロセスモデルのCRSに関する臨床家の印象

プロセスモデルとそのCRSについて臨床家はどうの印象を持っているか、筆者らは淀屋橋心理療養センターの何人かのセラピストを尋ねた。臨床家の評価した点は、初心者の訓練のために有益であるとのことである。つまり、セラピストが家族に接する時注目すべき点については全て網羅されているため、家族相互作用評価をCRS

を用いて行うことにより、家族療法を行う初心者に最適のチェックポイントを与えてくれるというのである。Steinhauer (1984) 自身も、全く同じ事を指摘している事は興味深い。プロセスモデルは元来、家族機能の普遍的側面を全てカバーする包括的なモデルを目指して発展してきた。その考案者からの意図が、充分理解されているとみることができよう。一方、プロセスモデルのCRSを家族機能を評価測定用具としてそのまま用いることには臨床家は疑問を持っていた。彼らもまた、CRSのいくつかの項目間にオーバーラップを認めており、尺度間の相関の強さも予測した。これらは、今回の調査結果と一致しているのである。

#### IV 結 論

本稿では、最近北米を中心に発展してきた家族機能に関する理論モデルの中からプロセスモデルを取り出し、それを基に作られた臨床評価尺度を用いて家族評価を行って、得られたデータからプロセスモデルを理論的及び実証的に検証しようと試みた。

理論的要素に関しては、概念の重複がいくつかの項目で認められた。外的要素については、予測的妥当性と構成概念妥当性は調査できなかったものの、基準関連妥当性と臨床的妥当性に関しては、ほぼ満足のいく結果が得られた。ところが、構造的内的要素において、重大な問題点が発見されたのであった。尺度間の相関の強さである。プロセスモデルは、家族機能の普遍的側面を全てカバーする包括的な理論モデルとして非常に優れたものである。しかし、本研究で理論的、ならびに実証的に検討してみると、一つ一つの尺度(構成概念)は家族機能の独立した側面を測定していないことが確かめられたのである。そのため、プロセスモデルを用いた家族評価(診断)は特定性を欠く。今後、プロセスモデルは尺度間の相関を最小限にとどめるように整理し直されなければならないと思われる。

確かに、今回の調査はサンプル数が少ないこともあって、この結果から早急にプロセスモデルの反証に関する結論を導き出すことはできない。

CVPのハイライトである構成概念妥当性についても現在H. SkinnerとT. Jacobを中心に調査が進められているところであり、その結果が目される(Skinner, 1986)。

尺度間相関の強さは、本稿でも述べたようにプロセスモデルだけに限られるのではなく、Family Category Schemaから発展したもう一つの評価測定用具であるFADにも共通してみられる欠点である。本稿のプロセスモデルの臨床評価結果と比較すると、同じ相互作用データにもとづくオルソン円環モデルの臨床評価研究では、きずな・かじりの2次元の独立性、及び促進次元としてのコミュニケーションときずな・かじり次元間の曲線相関が実証されている(大塚・立木, 1991)。プロセスモデルとの場合には、等質の概念と異質の概念の区分けを進め、更に上位の構成概念を想定することで尺度間の高相関を解決してゆく必要があるようである。

プロセスモデルをもとにして作られた臨床評価尺度(CRS)は、今なお発展途上にある。今後、更に研究が重ねられて臨床的に有益な、洗練された測定用具に発展することが期待される。構成概念妥当化過程に従って評価測定用具を作っていくことは長い年月を要する極めて骨の折れる仕事である。しかしこれらの努力によって優れた測定用具ができれば、臨床家を助けるばかりでなく、家族に関する科学は飛躍的に進むと思われるのである。

#### 参考文献

- Campbell, D. T., and Fiske, D. W. "Convergent and Discriminant Validation by the Multitrait-Multimethod Matrix." *Psychological Bulletin*, 1959, 56, 81-105.
- Cronbach, L. H., and Meehl, P. E. "Construct Validity in Psychological Testing." *Psychological Bulletin*, 1955, 52, 281-302.
- Epstein, N. B., Bishop, D. S., and Levin, S. "The McMaster Model of Family Functioning." *Journal of Marriage and Family Counseling*, 1978, 40, 19-31.
- Epstein, N. B., Baldwin, L. M., and Bishop, D. S. "The McMaster Family Assessment Device." *Journal of Marital and Family Therapy*, 1983, 9, 171-180.
- 池埜聡・武田丈・倉石哲也・大塚美和子・石川久展・



- 立木茂雄「オルソン円環モデルの理論的・実証的検討」『関西学院大学社会学部紀要』、1990年、61号、83-122。
- Jackson, D. N. "The Dynamics of Structured Personality Tests: 1971." *Psychological Review*, 1971, 78, 229-248.
- カーマイン, E. G. ツェラー, R. A.、水野欽司、野嶋栄一郎訳、『テストの信頼性と妥当性』、朝倉書房、1963。
- Loevinger, J. "Objective Tests as Instruments of Psychological Theory." *Psychological Reports*, 1957, 3, pp. 635-694.
- 正木直道、「家族機能モデルの実証的研究—プロセスモデル・臨床評価尺度の構成概念妥当化過程による批判的評価—」関西学院大学社会学研究科修士論文、1987。
- 正木直道、「プロセスモデルとは—家族機能に関する一理論モデル—」、未発表原稿 1987。
- 正木直道、「プロセスモデルの臨床評価尺度を用いた家族評価の手続き」、未発表原稿 1987。
- Messick, S. "Constructs and Their Vicissitudes in Educational and Psychological Measurement." *Psychological Bulletin*, 1981, 89, 575-588.
- 大塚美和子・立木茂雄「Clinical Rating Scaleによるオルソン円環モデルの実証的検証」『家族心理学研究』、1991年、5巻1号、15-32。
- Popper, K. R. *The Logic of Scientific Discovery*, London: Hutchinson, 1972.
- Santa-Barbara, J., and Steinhauer, P. "The Need for a Model of Family Functioning." In J. Santa-Barbara, P. Steinhauer, H. and Skinner (Eds.) *The Process Model of Family Functioning: Theory, Research and Clinical Application*. A Monograph, Toronto, 1981.
- Skinner, H. "Toward the Intergration of Classification Theories and Methods" *Journal of Abnormal Psychology*, 1981, 90, 68-87.
- Skinner, H., Santa-Barbara, J., and Steinhauer, P. "The Family Assessment Measure: Development of a Self-Report Instrument." In J. Santa-Barbara, P. Steinhauer, and H. Skinner (Eds.) *The Process Model of Family Functioning: Theory, Research and Clinical Application*. A Monograph, Toronto, 1981.
- Skinner, H., Steinhauer, P., and Santa-Barbara, J. "The Family Assessment Measure," *Canadian Journal of Community Mental Health*, 1983, 2, 91-105.
- Skinner, H. "Self-Report Instrument for Family Assessment." In T. Jacob (Ed.) *Family Interaction and Psychopathology: Theories, Methods, and Findings*, NY: Plenum, 1987.
- Skinner, H. Personal Communication, December 2, 1986.
- Steinhauer, P. "The Family as a Small Group: The Process Model of Family Functioning." In J. Santa-Barbara, P. Steinhauer, and H. Skinner (Eds.) *The Process Model of Family Functioning: Theory, Research and Clinical Application*. A Monograph, Toronto, 1981.
- Steinhauer, P. "Clinical Applications of the Process Model of Family Functioning." *Canadian Journal of Psychiatry*, 1984, 29, 98-111.
- Steinhauer, P., Santa-Barbara, J., and Skinner, H. "The Process Model of Family Functioning." *Canadian Journal of Psychiatry*, 1984, 29, 77-88.
- Steinhauer, P., and Tisdall, G. "The Integrated Use of Individual and Family Psychotherapy." *Canadian Journal of Psychiatry*, 1984, 29, pp. 89-97.
- Tatsuki, S. "Critical Evaluation of Family Functioning Models and their Assessment Measures from Construct Validation Paradigm." (prepared for a monograph from University of Toronto, Faculty of Social Work Publication Series), 1985.
- 武田丈・立木茂雄「オルソン円環モデルの構成概念妥当性の検証に関する方法論的研究」『家族心理学研究』、1991年、第5巻1号、33-51。
- Torgerson, W. S. *Methods of Scaling*, Wiley, 1958.
- Walsh, F. "Conceptualization of Normal Family Functioning." In F. Walsh (ed.) *Normal Family Processes*, NY: Guilford Press, 1982.
- Westley, W. A., and Epstein, N. B. *The Silent Majority*, San Francisco: Jossey-Bass, 1969.
- Wiggins, J. S. *Personality and Prediction: Principles of Personality Assessment*. Addison-Wesley, 1973.

## 付録：プロセスモデルの下位概念

### プロセスモデルの下位概念

プロセスモデルには6つの次元があり、下位概念は合計37あってCRSの項目となっていることは先に述べた。ここでは各項目の下位カテゴリーを紹介するが、紙面の関係上その全てを紹介することはできない。そこで、各項目についてのオリジナルの説明を原文のまま載せ、いくつかの項目のみ下位カテゴリーを抜粋して紹介するにとどめる。

#### 1. 課題達成 Task Accomplishment

1) *Identification* : Family members see tasks / problems the same way.

- 家族の主な課題について共通の定義がある事。例えば、

- \* 子供…親の過干渉に怒る。

- 親……子供は無作法である。

- \* 子供の問題か (e. g. 体重減少)。

- 親の問題か (e. g. 過関心、過干渉)。

この様に、家族の課題や問題の定義が家族員によって違つたとスコアは悪くなる。

- セッションの中で与えられる課題は、ここでいうTask (課題) とはとらない。

2) *Exploration* : Family explores alternative solutions.

3) *Implementation* : Family takes action and follows through on agreed approach.

- 同意した解決策を実際に行おうと努力さえしていれば、スコアは高くなる。

4) *Evaluation* : Family adjusts approach when initial attempts are not achieving results.

5) *Basic Tasks* : Family's capacity to meet basic needs.

6) *Developmental Tasks* : Family can perceive and meet needs of members at different stages of their life cycle.

7) *Crisis Tasks* : Family can function successfully when under major stress.

- 家族が適応能力以上のストレスを受ける時、うまくコミュニケーション・パターンと役割を調整し、危機を防げるかという事である。

- 他のメンバーばかりに責任を押し付けたり、反対に黙り込んでしまったりすると、スコアは悪くなる。

- あるメンバーが葛藤回避行動をとる事によって自分を守っていても、もし家族全体の危機が助長されていれば、その場合もスコアは悪い。

#### 2. 役割遂行 Role Performance

1) *Allocation* : Family is able to assign roles, agree to them, and fulfill responsibilities.

- 課題達成のために家族がどの様に役割を調整しているかを見るとよい。

- 例えば、子供が親を親として認めない場合、役割の割り当てに対する同意がないということで、スコアは悪くなる。

- また、役割の割り当てはされているもののメンバーが行動しないような場合、割り当てに対する責任を果していないということで、スコアは悪くなる。

2) *Coverage* : Role allocations ensure that all necessary tasks are accomplished (Comprehensiveness).

- 父親としての役割は割り当てられていても夫としての役割は割り当てられておらず、そのために課題の達成が妨げられているような場合、スコアは悪くなる。

3) *Complementarity* : Role allocations are efficient, with minimal overlap or role conflict.

- この項目は、サブシステムの境界に関する。例えば、母親が父親の果たすべき役割まで果していたり、子供があたかも親のような役割を取っているような場合 (pa-

rental child)、境界は崩れていて相補的な役割は取れない。従って、役割葛藤は増すのでスコアは悪くなる。

4) *Traditional Roles* : Capacity to organize and coordinate roles within and outside of the family; ensure minimal role conflict or related tension.

5) *Idiosyncratic Roles* : Extent to which any family member is trapped in a maladaptive or scapegoat roles (absence= strength; presence= weakness).

### 3. コミュニケーション Communication

1) *Clarity* : Communications are clear and understandable.

- ・話し手の verbal communication と nonverbal communication が互いに矛盾しているような場合 (ダブルハインド状況) も、スコアは悪くなる。

2) *Directness* : Communication are sent directly to the persons for whom they are intended.

- ・間接的にメッセージを伝えている場合 (例えば、娘が「お父さんは全然うちに帰ってきてくれへんもんね」と母親に言うような場合)、スコアは悪くなる。

3) *Sufficiency* : Necessary information is expressed, rather than being suppressed or withheld.

- ・送り手が受け手にメッセージを送ろうとしているのに、それを第三者が遮った場合、スコアは悪くなる。
- ・一人が話している間、他の人が支持していれば、スコアは高くなる。
- ・互いに言いたい事をどれだけ言っているかも rating のヒントになる。

4) *Receiver Openness* : Receivers are available and open (physically and psychologically) to understand messages sent.

- ・話し手が emotional な事を言っているのに受け手が instrumental な事ばかりで答えているような場合、スコアは悪くなる。

5) *Instrumental* : Communications needed

to deal with routine day-to-day family activity are exchanged and understood.

6) *Range of Affective Expression* : Family's capacity to express a full range of affect, including welfare (e. g. love, tenderness, joy) and emergency (e.g. anger, fear, sadness).

- ・家族が感情を表現し過ぎていたり、逆に表現するのを避けていたりすると、スコアは悪くなる。適度な表現がよい。

7) *Intensity of Affective Expression* : Communications are appropriate in intensity, avoiding understatement and over-reaction.

8) *Timing of Affective Expression* : Affective communications occur at or near the time of the incident, and are of appropriate duration.

- ・例えば、ある出来事が起こった時、それに付随する感情だけでなく、それ以前の出来事に関する感情まで持ちだしてくるような場合、スコアは悪くなる。

9) *Neutral* : Communications on general topics (neither instrumental nor affective) are clear, that is, not disguised or ambiguous.

### 4. 情動関与 Affective Involvement

1) *Security* : Family meets the emotional needs of all members to feel secure and worthwhile.

- ・家族メンバーが互いに受け入れ合っているか、つまり、家族の中で各メンバーが安らげるかが rating のポイントである。
- ・Empathic な家族では、スコアはよい。

2) *Autonomy* : Family allows each member appropriate latitude to think, feel and function independently.

- ・Enmeshed な家族ではスコアは悪い。

3) *Degree of Involvement* : Appropriate intensity of family member's relationships and involvements in each other's lives, avoiding extremes of detachment and enmeshment.

4) *Quality of Involvement* : Family relationships are supportive and constructive.

## 5. コントロール Control

1) *Control Maintenance* : Family members continuously influence each other to ensure that day-to-day functioning proceeds successfully.

- 望ましい状態で平衡状態が保たれていれば勿論スコアは高くなるが、望ましくない状態のまま保たれていても (rigid) スコアは高くなる。

2) *Control Adaptation* : Family can change usual patterns of interaction to accommodate new demands or changing tasks.

3) *Predictability* : One can anticipate how other family members will react in situations.

- コントロールスタイルに一貫性があるかどうかである。
- 従って、家族の動きが予想できれば、適応的な家族でも rigid な家族でもスコアは高くなる。

4) *Constructiveness* : Family exerts control in a helpful versus destructive manner.

5) *Responsibility* : Family members internalize a sense of responsibility and self-discipline.

## 6. 価値と規範 Values and Norms

1) *Family Influences* : Values and norms from parents' families of origin are not in conflict with those of the present nuclear family.

2) *Subgroup Influences* : Family values do not conflict with values of subgroups with which family members are identified (e.g. religious, ethnic, social).

3) *Cultural Influences* : Family's values do not conflict with the larger social and cultural context.

4) *Rules and Ideals* : Family rules and behaviour are consistent with stated ideals.

- 例えば、正直、誠実という理想を持つ家族

があるとする。家族メンバーが家族に見つからないように不正な商売をして利益を得ている時、スコアは悪くなる。

5) *Implicit/Explicitness* : Openly stated rules and ideals do not contradict those values that, while not explicitly stated, are insisted upon.

- 例えば、家族に「親を尊敬しなければならない」という明らかなルールがあるとする。この時、一方の親が他方の親を無視するようにと子供に暗に勧めるような場合、子供は間接的に葛藤を持つにいたるのでスコアは悪くなる。

6) *Latitude* : Individuals are given appropriate scope to determine their own attitude and behaviour.

- 個人の自律性のための家族の寛容さと関係がある。"Autonomy" は家族メンバーの情動的な関わり合いの点から評価する項目であるが、この "Latitude" は家族内のルールの点から評価する項目である。

7) *Conflict* : Family has major conflict about differences in values (e.g. religion, drugs, sexual behaviour, politics education, feminism).